

年用意 早村 春鶴

老妻の指示に従ひ年用意
すれ違ひ会釈なき友街師走
師走とて暮らしは同じ朝餉とる
急ぐ人急がぬ人にも師走来る
山隠し溪埋め尽くす冬霞

福寿草 一谷 春窓

初御空胸張る風に令和の字
陽の力借りて土割る福寿草
初詣孫と分けあふ福の餅
掌に握る小銭の温み初みくじ
初詣令和の砂利の音は伊勢

山茶花 東 素子

寒風や枝の鋭どき老桜
渋柿の残る実ひとつ今朝は地に
山茶花の薄紅花弁こぼれ散り
北風が走り小さき花ゆらす
町師走心躍らせ買ひ出しへ

山眠る 山本 春英

今日も又訃報のありて師走来る
冬日射すビルにゆれたる命綱
稜線に雲の影あり山眠る
入日背に葉のなき樹々や山眠る
もういいの同居五年の日記果つ

冬日向 ひなた 北畑 芳草

マフラーに顔の埋まりし女学生
早朝の厨房寒きすきま風
冬日向猫の親子の大あくび
足早に無言で通勤師走かな
日めくりの令和の師走はや半ば なか

冬に入る 貝賀賀代子

木の葉散る色まだありて枝の先
風ありて残る紅葉の二三枚
柀の花のこぼれをり日ぐれ径
年々に厚着とならむ冬に入る
時雨る、や橋の向かふに待つ笑顔

冬に入る 森本 智子

日溜りの猫大あくび冬に入る
どこでどう道違へしか時雨らる、
秋国体パラ陸上の大ジャンプ
立ち話秋の入り日にペダル踏む
懸崖ずらり十一月の花舗

小六月 富原 満枝

小六月楽の音はじけ子等の笑み
冬晴れや御幸の車列小旗揺れ
小春日の妃のティアラまぶしくて
作品展ポインセチアをお祝ひに
悴む手筆一本をもてあます かじか

朝露 (中三) 岡村 優

柿の香は金木屋と似通ひし
朝露の日の出すぎれば消へてをり
山火事を冬の雨風鎮火させ



延寿祭

早村 春鶴

書き初めは天満宮での初記帳
新年会華やぐ席の当たりくじ
令和なり復活なりし延寿祭
若菜摘む母子のありし畝傍山
天も地も時も止まりて月冴ゆる

年賀状

一谷 春窓

墨磨れば古代のかほり初音聞く
雪残る峰の樹々透け茜空
崖下の小さき祠や梅の花
名を知らぬ山真向かいの春霞
天竜の早き流れや春立てり

去年今年

山本 春英

赤ちゃんの小さな咳に一憂す
久しぶりひとり暮らしの去年今年
盲導犬主を守りし街師走
電話出ぬ友気がかりな冬の朝
豆腐屋の昔の笛や冬の朝

新年

北畑 芳草

気も新スマホを替へて初電話
穏やかに令和二年の初御空
主連飾こぼれし初も神のもの
南天の色に生花のひきしまり
日めくりの早や六日目の松の内

年の瀬

貝賀賀代子

冬の朝猫にせかさね顔洗ふ
沢山の笑みも鍋中おでん煮る
ばたばたの数へ日やがて鎮もれる
黄色い葉のせてバス待つ冬帽子
冬日射す窓辺の鉢の生き生きと

極月

森本 智子

極月や無沙汰を詫びに父母の墓
鳩を追ひ追はるゝ子らの冬日向
信濃路へ出荷せざる阿波冬菜
わらわらと崩れ落ちたり冬薔薇
行き交いす水脈の長さや冬うらら

冬の虹

富原 満枝

冬星座命街並み絆にし
書き初めの筆置き心解かれけり
冬入り日空を茜に染めあげて
拭き終へし窓に六甲冬の虹
書仲間と着物で集ふ新年会

手袋

(中二)岡里 莉那

焦らずにゆつくり過せばもう師走
心地よき冷めたき空気も露天風呂
愛犬は炬燵大好き吾に似て
雪積もり小さな天使作る子ら
足元の小さき手袋赤信号

書き初め

稲代 英明

秀頼も見しか天守の初日の出
成功を祈り書き初め五輪の夢
呑ん平は菓罐で熱爛茶碗酒



土佐路 早村 春鶴

瀬戸内の長き航跡春近し

二ヶ月の土佐路明るき遺墨展

遂道すいどうをぬければ土佐路二月の陽

如月の土佐は師の里遺墨展

百年の古木に一輪盆梅展

雛祭り 一谷 春窓

雛ひなの灯や氣儘きままな中にある孤獨

古色ひいろなおりりしき姿立雛

靴脱ぎてまたぎたくなる春の虹

彼岸会や小走りの僧若かりし

あおきふむ孫行く後をついて行く

年賀状 東 素子

年賀状友の笑顔がのぞきをり

旧友の今を知らせる賀状かな

一葉の名なし賀状謎めいて

以後中止添え書きありの賀状受く

「外からは…」一茶の一句小正月

書初 山本 春英

書初や体育館の児等真面目

書初や墨の香りの満つ体育館

力作の書初並らべ児等の笑み

勉学の孫を祈りて初天神

世話かけし知人の訃報お元日

春寒 北畑 芳草

盆梅市香りも共にざわめけり

げた箱の上のひと枝梅一輪

春寒や伸ばせし手足風呂の中

どこまでも続く梅林天満宮

春宵や熱中しすぎしスマホ買ふ

初茜あかね 貝賀賀代子

コーヒーと雑煮の香の朝戸惑ふて

朝日射す一鉢目立ちし福寿草

友の名の賀状の束に見当らず

御降りや万葉集に令和読む

生駒山陵線ほのかに初茜

冬帽子 森本 智子

実朝のうた神妙に筆はじめ

去年今年北に無窮のひとつ星

風神のさらっていきし冬帽子

成人式裳裾で渡る交差点

破魔矢受くみどりこ嬰兒息災四十年

洲浜草(雪割草) 富原 満枝

湯けむりに古泉つつまれ山がすみ

早春の金泉つかる孫の笑み

トンネルをぬけて古泉へ洲浜草

孫たちに心奪わる去年今年

異国にはなき春菊に娘は笑みを

新年 (中二)岡里 莉那

新年の神社の御朱印いたゞきに

足元にぼとりと一輪冬椿

堂々と一輪だけの冬そうび薔薇



紙雛 早村 春鶴

丹念に折りたる友の紙の雛
飾るものなき床の間の雛の軸
せゝらぎの音をまたぎて春の水
園児らの声の走りて山笑ふ
タイヤ跡残して乾く春田かな

蝌蚪(おたまじゃくし) 一谷 春窓

子の心離さぬ蝌蚪の動きかな
そばだちし崖にひと枝山桜
木の芽時ポートレートはセピア色
剪定の終えてかたぶく陽を受けて
感染症四月馬鹿だと思ひたし

山櫻 東 素子

葉の裏に青き実のゆれ風光る
雲浮かべわんに湧きし春の空
料峭(りょうせう)や魚調査の止水域
しおまねきはさみふりあげ思案顔
山櫻重たき蕾時を待つ

料峭||春寒のこと

春時雨 山本 春英

信号の変わりて走る春時雨
春寒や指をほぐしつピアノ弾く
春一番友の見舞へ向い風
ふつくらと影おとしをり紅の梅
春めきて佛像めぐりの旅支度

梅 貝賀賀代子

節分に八十路の句作誕生日
梅の香に誘われ降りる無人駅
匂ひ立つ梅の一輪今朝咲いて
正座して見上げる古木盆梅展
月ヶ瀬の村の賑はひ梅満開

春寒 森本 智子

人麻呂のも詠みし夕星(ゆうせい)春寒し
それぞれに香のこぼれたる梅の花
書展あり上野の森の春の妙
雪間草見えてせわしく鳥の来て
春疾風ふつ飛ぶまいと歩み止め

夕星||金星のこと

雛祭 北畑 芳草

春めきて庭の草木も装いて
少女等の声のはじけて雛の宴
凜として並びし江戸期雛の段
車窓より富士の裾野の春がすみ
おだやかな日だまりありて春時雨

東風(こち) 富原 満枝

富嶽景稻村ヶ崎に東風吹いて
春空に露座の大仏笑み交わす
雛姿母誕生日の和菓子
優しさの(ひい)雛と父母の笑み
湘南の春白波に浮かぶ富士



日永 早村 春鶴

添削の句の変わる楽しさ日永
建部なる安寿姫塚辛夷咲く
駅前のホテルは吾が宿春の月
出店なく通行止めの花回廊
木漏れ日の地撫で吹き去る春の風

余花 一谷 春窓

神前に合わず手に余花舞ひ来たる
夏籠げこもりの僧も時おり独り言
家籠いえこもる二番煎じの新茶汲む
感動を覚えぬ日常更衣
収まらぬパンデミックや夏嵐

子雀 東 素子

子雀や二羽地に遊び草中へ
春の雪一直線に迷ひなく
黒土に積む間鎮もる雪の果
樹々の枝日々色変へて山笑ふ
葉桜のそよぎ定まり蕊散しへらす

春の雲 山本 春英

なつかしき写真に出会ふ大そうじ
春休み親子で語る湯舟中
背伸びしてふと空見上げ春の雲
大帯となりて流るゝ春の水
春がすみ我が人生のひしめける

春風 北畑 芳草

世の中の花は咲けども気は重し
春風の頬かすめたる山の里
初蝶の風にさそわれ雲に消へ
満開の花見上げたる老夫婦
窓をあけ春風入れてティタイム

水温む 森本 智子

ももいろの風のそよぎや雛祭
水温む水切石の三拍子
生検の結果何如春一番
ふたもとの山菜ぐみ莢の花黄を点とす
黒牛の群るゝ牧場草青む

馬酔木あせび 富原 満枝

猿沢の池面に花も塔も揺れ
境内の馬酔木に吸はれ歩を早め
盆上の大和漬物春野菜
春の寺人より目立つ鹿の群れ
木蓮の香に迎へらる無人駅

木蓮 (中三) 岡里 莉那

後任末母にまかせし雛飾り
陽の射して輝やく樹々や雪の果
清美なる姿空射す紫木蓮



更衣 早村 春鶴

袖子若葉棘を残して鹿の害
枝折らる留守の隣家の柿若葉
山の色数を増やして夏に入る
外出の規制のさ中更衣ころもがえ
堤防に百一匹の鯉職

草取り 一谷 春窓

喋りたき人ぬ庭の草取り女
木曾川の蒼き際立つ虹二重
父の日や普段の暮らし希のぞみをり
世の鬱憤うづがえ晴れぬがまゝに竹落葉
重なりし葉桜の陰一里塚

夏に入る 山本 春英

外遊び大人張り切るしゃぼん玉
咲き続くシクラメン負けられぬ吾
夏に入るあと一周で一万歩
子雀の何を語らふ餌を拾らふ
風船の割れて驚き泣く児かな

若葉 北畑 芳草

鯉職立てる家減り過疎すすむ
校庭に人影消へて若葉風
気がつけばいつしか我が家若葉中
畑仕事緑陰で憩ふ弁当
掌に余るえんどう獲とれて笑み浮ぶ

花筏 森本 智子

春風や吐く息長きヨガポーズ
ゆるゆると離れて寄りて花筏
三三五五雀飛び立つげんげの田
我れ先にひしめきあひて上り鮎
夕闇にかほりて垂るる濃山吹

新樹 富原 満枝

朝の陽を浴びし鳥居や若楓
鳥の声新樹にひびく散歩道
新緑に包まれ鳥も声競ふ
五月好き鳥の美声につい拍手
雨止んで一夜明ければ若葉して



竹落葉 早村 春鶴

地上まで舞ひ舞ひ舞ひて竹落葉
代かきの終わりにて一日農のあと
植田まだ水面を流る苗ありて
茎乱れからまる皿のさくらんぼ
黒南風の若狭の重き波頭

十葉 一谷 春窓

笑ふこと憚りし世や釣葱
コロナには負けてはならじ草刈女
丁寧ていねいに洗ふ手指や冷奴
鳥籠とりかごの影くつきりと大夕焼
十葉や復信の来ぬ同級生

梅雨寒 東 素子

手漉箋てすきせん淡墨にじみ梅雨に入る
神楽坂紙屋かぐらの閉じし梅雨寒し
草茂る更地を占める生命かな
庭木伐る六月の空広がりにて
同好の集いそれぞれ夏衣

夏野菜 山本 春英

鉢の増え若葉の並ぶ街旧家
旅心急せかす知らせに谷若葉
鯉こい職肩で泳がせ園児ゆく
ひとり身のサラダは全て夏野菜
空青しレモンをゆらす若葉風

田植え 北畑 芳草

雨止んで息づく庭の七変化
雨蛙声を合わせて雨を呼ぶ
田植機の競ひ合いたる隣の田
整然と並びし植田農夫去る
子どもらの声なき校庭梅雨に入る

とかげ 森本 智子

陽の射して庭の若葉の影の濃く
碧空にクレインの伸びて五月鯉
どっどっど太古の姿勢縞とかげ
支柱まで届かぬ胡瓜そら宙つかむ
コロナ禍の夏を快走無乗客車

青葉 富原 満枝

水まとふ木々に黒南風やうしやなく
紫陽花の蓄色つぼみづく日々待ちて
玄関のドアの白さやアマリリス
マンシヨンの垣根はピンク杜鵑さつき花咲く
草取りの人に感謝し山歩く

若葉風 東 素子

ぐんぐんと柿若葉萌え空を割る
若葉風名手の技の薩摩琵琶
薩摩琵琶さつまピアノでジャズに若葉風
ふくみたる新茶愉悅ゆえつの時の中
更紗木瓜さらさわ仰ぎて園児今朝の庭
(前月未掲載分)



玉の汗 早村 春鶴

汗のシャツ肌にはりつく道普進
汗の手で汗の額を拭いけり
着替えても農の帰りは玉の汗
胡瓜の胡シルクロードをきざむ音
包丁を入れるや否や西瓜割れ

汗 一谷 春窓

吾の様子見に来たる娘と夏蜜柑
不意に来る夜の訃報や稲光
遺影背に写経三昧夏座敷
完走の満ち足りし汗そのままに
三振に蹴る土ぼこり日焼けの子

炎天下 東 素子

遠き日のしじまの奈良や夜半の夏
日盛りの縁でスケッチ法隆寺
夏山の車窓の富士の見え隠れ
羽根休めまた舞ひ舞ひて夏の蝶
今朝の陽の光吸ひ寄せカンナ咲く

梅雨空 山本 春英

電話口元気な友や梅雨晴間
我が人生省みる時額の花
診療を待ちたる老人梅雨寒に
スーパールのレジに長蛇や梅雨の空
紫陽花の見えたる径今日もまた

汗 北畑 芳草

畑仕事老女の顔に玉の汗
かきわけし暖簾の奥のかき氷
令和とてコロナと豪雨の夏最中
シャツの背ににじみたる汗色変わる
おかわりのご飯のすすむ冷奴

短夜 貝賀賀代子

休まずに丘に登れば若葉風
梅雨晴間傘を杖にし長話
短夜や夢の続きは今日の夜に
ガレージに広がる青梅香の満ちて
緑陰や太極拳のゆるやかに

梅雨晴 森本 智子

梅雨晴や藁きはだの苗たくまの逞しく
そよ風にうなずき揺れる七変化
お岩木の山の風のせ鳴る風鈴
校庭のいたずら描きや蛞蝓なめくじら
オリーブ咲くドリルうな唸らす歯科医

青鷺 富原 満枝

青鷺の何時しか睦みて飛び立ちぬ
睡蓮の花の輝き陽を浴びて
自粛解除とて白靴をはずませて
岩を打つしぶきの涼し造り滝
憩いたる小さき茶店葛まんじゅう

あじさい (小5) 山口穂奈美

あじさいや雨を待ってる晴れた日に
見つけたよ葉っぱのうらの天道虫てんとうむし
ママだけにおくったあじさい誕生日



星月夜 早村 春鶴

山里の頭上は丸し星月夜
洗ひたる硯新墨試し播り
火花散る線香火花今盛り
仏壇の茶湯を替へて今朝の秋
今朝秋や心も澄みて出かけけり

栗飯 一谷 春窓

登高や色づきしもの褪せしもの
留守の間に母置きくれし栗ご飯
茹栗の笹に溢るるぬくみかな
風吹いて風鈴しまい忘れしを
湯気あがる土の香残る衣被
(登高 九月九日の重陽の節句に
高い所で菊酒を飲む)

初盆 東 素子

初盆の君は神戸の坂の地に
風見鶏晩夏惜しみつ歩みし日
雑草の路辺の草叢蓼一本
朝採りのそら豆持参友来たる
六時間かけて羽化せし蟬真白

夕星 山本 春英

大瓜の土に寝かせて老農婦
夕星の一つ光りて汗の利き
汗飛ばしボール追ふ子等体育館
男梅雨河氾濫の記事滲む
訪れし友の大瓜重きこと

花火 北畑 芳草

住宅街屋根の間に間に花火客
打ち上げし花火の色に空染まる
稲の花咲くあぜ径に鳥の二羽
朝夕の空気も変へて秋立ちぬ
盆踊をも中止さすコロナ禍

昼寝 貝賀賀代子

コロナ禍のさなかの浪速油照
又一つ楽しみ増えし昼寝かな
百日紅土塀の中の屋敷跡
絵日傘の行列の中黒一点
大泣きの幼児抱く母汗みどろ

胡瓜 森本 智子

ボランティアの汗拭ひたる汗の腕
リズム良く挽ぎ立て胡瓜刻む朝
コロナ禍は祇園祭も払い除け
天空に届く棚田大青田
親株の根元ふつつ蒼荷の子

硯洗 富原 満枝

作品を書き終へ硯洗ひけり
大輪に足の止まりし花芙蓉
摘みて来し隠元すぐにおひたしに
首垂れ風にうなづく蓼の花
例年と異なる文月コロナ禍で



夜霧 早村 春鶴

里山の夜霧に沈み消灯す
急しなく乗り込む列車秋扇
腰痛め寝込みし妻の秋団扇
園児の歯白さの目立つ九月来る
コスモスの色の分かれ目迷路とし

秋冷 一谷 春窓

髪切つてうなじ風に秋を知る
コスモスの街道抜けし風の色
高原の風に波なす花すすき
薄紅葉家に居る日々重ね来て
秋冷や白き波立つ梓川

狗尾草(ねこじやらし) 東 素子

秋めいて夜更くるまゝに墨をする
レンガ館色づく樹々に実銀杏
赤く透き枸杞の実トゲを潜ませり
遠くより猫の目線のねこじやらし
登高の土間丸椅子で盃重ね

盆の月 山本 春英

秋立つ日音なく過ぎる救急車
ダイエット娘には短かき夏休み
店頭のコスモス多彩客群れて
息絶へてなほ葉をつかむ秋の蟬
バイトの娘迎へし夜半の盆の月

空 蟬 北畑 芳草

少しづつ凌ぎ易くて秋立ちね
空蟬を残せし木々や疲れをり
乱れ咲く鉢のベゴニア花こぼす
コロナ禍を嘆く夕蟬声悲し

花 火 貝賀賀代子

初浴衣少女の胸の豊かなる
火花果て火薬の匂ふ河川敷
雲の峰背負って走る下校の児
除草されボールぼつんと夏終わる
秋近し店頭賑わす直木賞

今朝の秋 森本 智子

無人駅レールの奥の遠花大
撤退の決まりしデパート秋に入る
古民家の戸を開け放ち今朝の秋
天地は灼熱地獄終戦日
悠々と輪を描くとんび風天忌

(風天忌 風天の寅さんこと渥美清の
命日・八月四日)

蟲の音 富原 満枝

朝日あぶ黄花コスモス恥らふて
蟲の音のいつしか変わり夜も更けて
午後となり傘で防げぬこの暑さ
秋茄子や紫紺の皮の艶やかに
秋冷の風一瞬の頬なでる



鱚雲

早村 春鶴

野にありてこそその野菊は手折らずに
ビル群の窓の全てに秋の雲
秋霖しゅうりんや小さき傘に肩を寄せ
裏山の緑に一樹初紅葉
西空の固まりくずれ鱚雲

片時雨

一谷 春窓

尼寺の軒先借りる片時雨
木曾よりも一足早く冬圍がこい
山の木々抜けて風窓を打つ
七五三色の深まり野も山も
投函の音確かめて枯葉道

零余子

東 素子

新米やこの煌めきを賜りて
銀木屋初咲き知らず香の流れ
不揃ひの零余子流れるつるに乗せ
小花寄せ香りを放つ銀木屋
キリギリス緑に同化して葉裏

秋の夜

山本 春英

雨女言われし友や秋の雨
コスモスの頬ほほにふれし子笑みこぼる
この群れも子育て終えて秋燕
秋の夜や古き手帳に師の講話
秋彼岸鬼籍きせきに入りし友の増え
(鬼籍||死者のこと・過去帳にのせること)

秋の雲

北畑 芳草

長き夜やいざ書作へと筆を取る
コスモスの迷路出られず苑広し
風の出で形を変える秋の雲
中天の一隅ぐう占める鱚雲
疲れたる身には窓辺の秋の風

秋遍路

森本 智子

何気なく風に揺れゐる秋桜
コスモスの迎へてくれし屋敷町
コロナ禍の中早立ちの秋遍路
ペンを置く臥待月ふしまちつきと目の合ひて
キリギリス鳴き止まずして戌の刻いぬとき

秋声

富原 満枝

秋晴や波のしぶきの鳥を打つ
古民家の露地の向こうは秋の空
秋の声江戸期の銘の常夜灯
二玉たまの蕎麦そばゆで夫と昼餉ひるげ時
菊手たむ向け誓い新たに原爆碑



